NOV.21.1984
図書館

佐伯史談

第九十一号

「郷土史研究誌」
通算第百十三号

昭和四十八年十二月十五日

発行所 佐伯市大字稲垣字龍護寺羽柴方
佐伯史談会

所感

『佐伯史談』を読んで

―私はこのように思った――

在大阪　矢田清

本日正午「佐伯史談」第九十号落掌致しました。

「再遊また楽し」――高千穂から竹田へ――高木会長私はまだ高千穂は全然行った事なしで、先年帰伯中、大分バスの催しで、霧島・宮崎・鹿児島旅行をした際、排暁バスの上から、あの高い山々の奥が高千穂らしいと山だけを望見したきりで、旅行案内の写真には、有名な高千穂峡が出ています。あれは天下の奇観で　あれだけでも是非一度とは思っているのですが・・・・・。佐伯から宮崎、熊本と、山また山ばかりのところを、車でというのですから大変で、まあどうしてもかれこれ四十里位はありましょうか。竹田にも、もう一度行って見たい所で、当日ピンポンをして遊んだ小学生の子供連とて、もう爺さんになっていることでしょう。

「佐藤鶴谷翁と私」　従来共よく聞く鶴谷翁の大体が、これで解りました。随分佐伯では古い人らしいけれど、これまでは何をして来た人やら、一向に分らなかったものです。なるほど、これだけの学力があれば、「佐伯志」の著述も当然の事と大いに感心です。大体この文筆仕事というものは、暇になったから急に思い立って、という具合にはゆかぬもので、文章を作る人は筆を持たんで、単なる俗用で街を歩いている時でも、念頭から文章の事は離れることなく、これで特には自転車に突き当ったりなどで、この位熱心でないと、一寸した紀行文でも中々やれるものではありません。何しろかの大養総理とは、オレ、オ前の仲であったというのですから、大したものです。

「日向纂記と山田主徳」（主徳は千カノリですか）

方々に九州戦国時代の猛将

本号内容

感想　佐伯史談を読んで（矢田清）…一
研究　甘藷考（小野武夫）……三
研究　佐伯宿林久良蔵記（佐脇）…一〇
説伝　桃花塾出宮崎佐一先生（羽柴）…二
研究　佐伯城絵図解説（小野英治）…一五
研究　鶴見半島の猪垣について（二）……一九
（安部水哉）
研究　横川先生と佐伯（山本保）…二五
研究　用水城由来記（桜井幸）……三
研究　用水城について（小野英治）…三九
紹介　代後浦村田畑内検地高帳……三二
記録　四国一周バスの旅……三一
胡野尚史談会近況、鏡峠から芳賀へ、集会案内その他……

で、大江匡房の兵学を学んで匡徳と号し、大いに島津勢をなやましたらしく、何しろ当時の戦争は、すべて名乗りをあげての一騎討ちですから大変で、よほどの体力がなかったら、あの重い甲冑では、腰もあがれはしません。当時の食糧は玄米に塩だけで、甲冑・刀槍・兵粮を合せて約四十キロですから、馬とてたまりますまい。

「龍渓矢野文雄先生」　なぜこれ程どの実力者が、政界と縁を切ったかですが、政治というものは俗中の俗事で、場合によっては、相手方の首級を頂戴する位の（現代ならば社会的に葬り去る位の）奸悪さを必要としました。

龍渓先生は、その日常生活もですが、金言集によりましても、大変な理想家ですから、とても濁りきった政治社会に生存して行く気はなく、それで政界から絶縁したのだと思います。水清ければ、魚棲まず、です。

「佐伯城絵図解説」　鶴の丸、これは一寸解りません。お城全体が鶴の丸ですから。然し図は簡単ですが、将兵の集合する広間でもあったメではないでしょうか。小さくとも実際に築くとなれば中々の難工事で、相当の犠牲者が出た事と思います。

「桃花塾岩淵佐一先生」　私も昔子供の時に、岩淵先生のお名前だけは聞いたことがあり、それはまあ、多分古い佐伯小学校の先生だろう位に思っていたのですが、中々どうして、今日でもやり手のない白痴教育で、その白痴児童をどうして教えこなすのか。これはもう困難さが度合いがちがいます。普通児でも先生の方が腹を立ててなぐったりするのですから——。

「鶴見半島の猪垣」　猪害防止の萬里の長城でしょう。村民総出の大土木工事で、道路作りの幾十倍かの労力と費用ですが、私は小豆島の猪垣も見ましたが、さぞまで大きな石垣でもなく、猪というものはあれ位で止まるものでしょうか。パッと一飛びに飛び越えそうなものでした。

「横川先生と佐伯」　台風の被害、なる程到る処山崩れやら洪水やらで、つまり子供の造った築山に、バケツの水をかけるのと同じく、長雨で土壌そのものが流るんでいるのですから、ひとたまりもありません。然し市街全域浸水など以想像外のことで、池船橋までよく水見に行ったもので、その記憶はあっても、町中が水づかりへ昭和十八年）というのは、見たことなしです。

「法燈いまだ消えず」　畑の浦とはまた私には懐かしい所で、畑の浦の医師が絵好きで、私を後援するというので、三回程畑の浦へ行きました。木立から歩いてあの急坂を越して、一週間泊ったりました。今は峠路もその頃とは全く変っていましょうが、まうあの峠は越さずとも、別の道が出来たとかですが、峠の茶店の婆さんが、「ここで五円札を出すバカが居る。よしんば釣銭があったとて、そげなお客は断る。」と怒っていたのを憶えていまして、——当時の五円は今の一万円にも相当します。

畑の浦では、家から一歩も出ず仕舞でしたので、どこに何があったやら知りませんが、その、とだかじようかんの唄だけは記憶にありまして、村人はよく口にしていたものでした。

「賓龍侯の書翰」　生きた爽が出て来たとあっては、只事ではすまず、責任者は切腹ものです。この書翰作製は

多分右筆の誰かと思いますが、中々よく出来ていまして、これを受けた家臣は大狼狽でしょう。然しこの解読が又大変で、こういうものは半分解ったらいいうちです。それにしても、表高二万石の小藩が、よくぞ蒐めたりな八万冊の書籍を、とこれには驚き少なからずで、八百冊でも多いのに八万冊とは――――。

特に、伊賀会員には八月十八日、肺炎症で急逝とあり、全く惜しい人を亡くしました。特に話したこともなかったのですが、話したら一番手応えがありそうに思いまして、何時か一度と思っていたのですが。一周忌までには仏画の色紙の一枚でも、と思っています。

色紙は、小野英治氏にも鴛鴦（おしどり）を一枚さし上げたく思っては居るのですが、何分にも仮急史談会諸子の分が忙しいものですから、まだ描けずに居ります。

しかし、伊賀氏は残念で、こんなこと迄ら一寸でも話をしておいたらよかったのですが、もう今となっては後の祭りで、こうなって見ますと、いつどこでどういう病気で、人というものはこの世を去らねばならぬ様になるものやら、そぞろに悲しくなって来ます。

私が交通事故で負傷するその前夜、よく芝居で「長い夢を見たなあ――、すべては夢だった。この世は夢の世の中だった」というセリフのある場面が出て来ますが、それとそっくりの夢を見まして――。後頭部でも、もう少し下と打っていたら即死する所だったと医者も言っていましたが、これも何かの前兆だったという所でしょう。お互いに、まあどうやら一命だけは助かりまして、目出度き次第です。以上史談誌故掌方々　匆々敬具

十月一日　午後　（以上）

（筆者氏、佐伯史談会顧問
住所。大阪市東淀川区木川東之丁三丁目七）

研究

甘藷考

―どのような経路で佐伯に伝わったか。―

蒲江　小野武夫

戦後超高度成長と、食生活の大変革によって、私たちの食膳から、甘藷は姿をひそめてしまった。かつては私たちの主食であり、それを一年中食って成人していったものであるが、長い間にメモに書き、ノートに集めていた甘藷についてのものを、少しばかり書きつらねて見たい。

清朝の初めごろ（紀元一六一六年前後）、康熙帝が、忌諱（きい―おとがめ）にふれた官女を、南の無人の島に流罪にし、数年経って呼びかえした。さだめし焦燥しているだろうと思っていたのに、案に相違して、官女の肉はこえ、皮膚の色つやもよく、前よりも容色はよくなり、一段と美人になっていた。

帝は不可思議に思って、

「彼の島には何一つ食う物はないのに、何を食って生きていたのか。」

とお尋ねになったところ、官女が答えて申すには、

「初めは食べるものがないので、水ばかり飲んで泣いてばかりいましたが、島一杯にふしぎな蔓草が生えしげっていて、根を掘ると実ができている。それを取ってそのまま、或いは煮焼きして食べ、命をつないでいました。」